



梅雨明け後の高温でハダニ類を含めた主要害虫の発生密度が一気に高まっています。引き続き一定の間隔で薬剤散布を進めてください。尚、シンクイムシ類の食入被害果が散見されています。この時期は特に散布死角がでないように徒長枝切り等を事前に実施し、薬液が通りやすい環境を作ってください。

りんご 8月上旬の薬剤散布（前回より 15 日後）

散布時期：8 月 5 日～10 日

散布薬剤：

水 100 リットル

展着剤 10ml *注意事項②参照

ディアナWDG 10g（前日、2 回） *注意事項③、④参照

ダイパワー水和剤 100g（14 日前、3 回）

散布量：10a 当たり 600 リットル

対象病虫害：輪紋病、炭疽病、斑点落葉病、褐斑病

シンクイムシ類、ハマキムシ類、キンモンホソガ

◆ 散布日：8 月 日

◆ 散布量： リットル

【注意事項】

- ① ハダニ類対策：発生が目立つ（葉裏が赤色等）場合は、8 月下旬散布予定のコロマイト乳剤 1,000 倍（前日、1 回）を繰り上げて今回の散布に加用する。
- ② 通常展着剤（ハイテンパワー等）に代えて、機能性展着剤のササラの 2,000 倍（100 リットルに 50ml）を使用すると薬液が葉裏（毛じ間）に広がりがよくなり、散布後の乾きも早くなる効果がある。（殺虫剤との相乗効果）
- ③ ディアナWDG の使用倍率に注意する。（10,000 倍希釈）
- ④ シンクイムシ類対策：ディアナ WDG に代えて、バリアード顆粒水和剤 2,000 倍（前日、3 回）を使用する。尚、バリアード顆粒水和剤は劇物登録のため、購入の際は印鑑をお持ちください。
- ⑤ 収穫前規制（ダイパワー水和剤）のため、極早生種（夏あかり・さんさ・シナノレッド・恋空等）には飛散しないようにする。また、つがる等は収穫開始 14 日前までには散布完了する。
- ⑥ 褐斑病対策：ベンレート水和剤 3,000 倍（前日、4 回）を加用する。
- ⑦ 園地の外周等死角がないように、散布量は多めに設定する。また、薬液が樹内部まで到達するように散布前に徒長枝切りや支柱立て等も積極的に実施する。

◆ 次回（8 月中旬）薬剤散布予定：8/20～25
引き続きハダニ類・シンクイムシ類の重要防除です。

りんご早生種の栽培管理は次頁をご覧ください。

1. つがる等の着色管理について

- ① 日焼け果防止対策：果実温の高い日中に作業を行い、早朝や夕方、果実温の低い時間帯には行わない。
- ② 徒長枝切りや枝つり、支柱立てを早めに行い樹冠内部への光の導入を図る。
- ③ 葉摘み：収穫の7日前位（8/20前後）から始める ⇒ 日焼けを助長するため、あまり早期に実施しない
 - 1回目：日焼けに注意しながら、果実に密着している果そう葉を中心とした軽い葉摘みを行う。
 - 2回目：着色の様子を見ながら玉回しと合わせて実施する。（収穫直前頃）
- ④ 一度に強い葉摘みを行うと、日焼け果の発生を助長するので注意する。
- ⑤ 玉回し：果実が30%程度着色したら1回目を実施 ⇒ その後に収穫直前頃の葉摘みと併せて2回目を実施する。
- ⑥ 直射日光の当たる部分の葉摘み、玉回しは実施しない。

【収穫時の注意】

- ① 着色のみではなく尻部の地色の抜け具合も注意する。つがるの収穫は高温時であるため、過熟果の発生がないよう熟度を考慮しながら行う。（着色ではなく鮮度重視とする）
- ② 同一の樹のなかでも果実により熟度の差があるので、数回に分けて収穫する。
- ③ 鮮度保持対策：日中の高温時の収穫は出来るだけ避ける。収穫した果実は日陰などの涼しい場所に積んでおく。

【灌水・土壌管理】

- ① 高温・干ばつにより土壌水分の蒸散が激しい時期なので早めに灌水を行い園地内湿度を一定に保つ。尚、雨が5日以上ない場合は、1回のかん水量を20～35mm目安に実施する。
- ② 水分不足は果実肥大に影響し、水分ストレスはつる割れ果等の発生を助長する恐れがあるので注意する。

2. つがる等の落果防止剤の散布について

- ① 対象品種：つがる
- ② 使用薬剤：ストップール液剤
- ③ 使用時期：収穫開始予定の25～7日前（2回以内）
- ④ 使用倍率：**1,500倍** ⇒ 水100ℓに66ml・展着剤は加用しない
- ⑤ 散布量：500～600ℓ／10a
- ⑥ 散布時期：収穫開始予定の15日前に1回散布処理
 - 目安：8/1～5頃
 - 収穫前規制のため、収穫開始は散布後7日間経過後とする

◆ 散布にあたっての注意事項

- ① 展着剤は加用しない。
- ② 単用散布を厳守する。（他剤との混用は絶対にしない）
- ③ 乾燥条件下では効果が低減するので、定期的なかん水を行い、園地内の湿度を上げる等の対策をとる。
- ④ ホルモン剤ですので他の農作物、特に野菜等にかからないように注意する。（生育障害・薬害発生の恐れ）
- ⑤ 落果防止剤を散布すると熟度が早まり、果肉軟化を助長しやすいので、過熟果が発生しないように注意する。

